［16］

氏　　名	古屋（ふるや）　あい子（あいこ）
博士の専攻分野の名称	博士（外国語教育学）
学　位　記　番　号	外博第 33 号
学 位 授 与 の 日 付	2021 年 3 月 31 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学　位　論　文　題　目	The Role of Background Knowledge and Vocabulary Knowledge in Listening Comprehension at Three Levels of English Proficiency: Insights From Top-down and Bottom-up Processes
論　文　審　査　委　員	主 査　教　授　竹内　理 副 査　教　授　山根　繁 副 査　教　授　新谷　奈津子 専門審査委員　教　授　吉井　誠（熊本県立大学）

論 文 内 容 の 要 旨

古屋あい子氏の博士学位請求論文 *The role of background knowledge and Vocabulary knowledge in listening comprehension at three levels of English proficiency: Insights from top-down and bottom-up processes.*（英語能力の差異から見えるリスニング理解における背景知識と語彙知識の役割―トップダウン・ボトムアップ処理からの知見）は、英語能力が異なる学習者を対象にした 3 つの研究を中核とし、以下の 7 章から構成されている。

第 1 章：Introduction（序章）
第 2 章：Literature Review（先行研究の概観）
第 3 章：Study 1 (Studies 1-1, 1-2)（研究 1 ―上級学習者を対象に）
第 4 章：Study 2 (Studies 2-1, 2-2, 2-3)（研究 2 ―中級上位学習者を対象に）
第 5 章：Study 3 (Studies 3-1, 3-2, 3-3)（研究 3 ―中級下位学習者を対象に）
第 6 章：Overall Discussion（全体の議論）
第 7 章：Conclusion（結論）
References (77 編)
Appendices A-T（付録 20 編）

第二言語習得において、リスニング理解は重要な役割を果たしているが、そのスキルが持つ（1）可視化できない、(2）複雑に要因が絡み合っているという側面から、学習者はリスニング理解に特に困難を感じる傾向がある。それにも関わらず、第二言語におけるリスニング理解に関する研究は、未だ十分に行われているとは言いがたい。特に第二言語の能力による違いに焦点を当てた、リスニング理解のプロセスに関する研究は非常に少ない。このような現状を踏まえ、古屋氏はトップダウン・ボトムアップ処理の枠組みに基づき、第二言語の能力別にリスニング理解のプロセスの解明を試みることにした。この際、トップダウン処理については背景知識の活性化を通して、ボトムアップ処理については語彙知識の活性化と語彙認識を通して研究をすすめることとした。同氏は、これらの結果を基に、能力別にリスニング理解を高める方法を提案している。

第 1 章では、まず、外国語のリスニング理解の過程における特徴について言及している。最初に、そのスキルに困難さを感じている日本人英語学習者が多いことを指摘し、その後、リスニングを複雑にしている要因を取り上げ、さらに、リスニング理解における認知的処理の枠組みを、先行研究に基づき提示している。提示した枠組みとしては、トップダウン・ボトムアップ処理、Anderson (1995) のモデル、スキーマ理論、並列分散処理モデル等がある。本章後半では、これらの枠組みのうち、トップダウン・ボトムアップ処理の枠組みを採用することを宣言した上で、本研究のデザインの詳細、および各章の概要について言及している。

第 2 章では、文献調査に基づき、本博士論文の研究課題が提示されている。はじめに、トップダウン・ボトムアップ処理の定義を提示し、Vandergrift & Goh (2012) の提唱するモデルを説明し、続いて、リスニング処理における相互補償的側面と相互確証的側面について論じている。その後、ボトムアップ処理の活性化を促す語彙知識、トップダウン処理の活性化を促す背景知識を取り上げ、リスニング理解におけるそれぞれの役割を示している。最後に、本研究における仮説を、3 段階の外国語能力別に提示して、本章を終えている。先行研究から導き出された言語能力別の仮説（Hypotheses: H）は下記の通りである。

<u>上級学習者</u>　(Study 1)

H1: 高い言語能力を持つため、リスニング理解において語彙知識と背景知識を同様に使用することができる（相互的確証）

H2: 語彙認識は（a）「語彙知識あり」、「背景知識なし」(b)　「語彙知識なし」、「背景知識なし」の両方の条件においてリスニング理解と相関が見られる

<u>中級上位学習者</u>　(Study 2)

H1: リスニング理解において語彙知識不足を補うため、背景知識に依存する（相互的補償）

H2: 語彙認識は（a）(b）両方の条件においてリスニング理解と相関が見られない

中級下位学習者 （Study 3）

H1: リスニング理解において語彙知識不足を補うため、背景知識に依存する（相互的補償）

H2: 語彙認識は（a）(b）両方の条件においてリスニング理解と相関が見られない

続く第 3 章 （Study 1)、第 4 章 （Study 2)、第 5 章 （Study 3）では、上に示した仮説を、それぞれ上級英語学習者、中級上位英語学習者、中級下位英語学習者を対象に検証している。具体的には、(1）語彙知識と背景知識を操作した 2 条件のリスニング理解の研究（Study 1-1, Study 2-1, Study 3-1)、(2）語彙知識と背景知識を操作した 4 条件のリスニング理解の研究（Study 2-2, Study 3-2)、（3）上記の(1)で得られたリスニング理解と語彙認識との関係を探る研究(Study 1-2, Study 2-3, Study 3-3）を行っている。なお、(1）では混合研究法が用いられ、(2）と（3)では量的アプローチが採用されている。

本研究の参加者は、大学生英語学習者で、言語能力は TOEIC® L&R Test で測定され、上級学習者（TOEIC® 905–990)、中級上位学習者（TOEIC® 730–795)、中級下位学習者（TOEIC® 535–620）と設定されている。リスニング教材は、リーダビリティ、発話速度、発話時間、語彙数、段落数、未知語数、話題数、話者数、話者の性別とアクセントが統制されていた。条件に関しては、2 条件（a)「語彙知識あり」＋「背景知識なし」、(b）「語彙知識なし」＋「背景知識あり」、と 4 条件 (a), (b), (c）「語彙知識あり」＋「背景知識あり」、(d）「語彙知識なし」＋「背景知識なし」が設定された。

リスニング理解のタスクでは、参加者は、2 条件（Study 1-1, Study 2-1, Study 3-1）と 4 条件（Study 2-2, Study 3-2）のリスニング教材を聞き、メモをとることが許可された状況で、日本語を使っての教材内容の書き出しを行っている。続いて、事前知識を確認するための質問紙にも回答している。その後、著者の古屋氏は、書き出したものとリスニング教材を照らし合わせながら、リスニング理解における条件の影響について（2 条件のみ）刺激再生法による追跡面接を実施している。語彙認識のタスクでは、ディクテーションが用いられている。

結果として、英語上級学習者を対象とした場合、リスニング理解のタスク（Study 1-1）では、(a), (b）両方の条件において、リスニング理解に統計的にみて有意な差が見られなかった。また、追跡面接においても同様の結果が得られた。これらから、仮説は支持され、相互的確証が行われていることが確認された。続く、語彙認識のタスク（Study 1-2）でも仮説が支持され、語彙認識は上述の(a), (b）両方の条件において、リスニング理解と相関があることが確認された。

中級上位学習者を対象とした場合は、リスニング理解のタスク（Study 2-1）では、

上述の(a) よりも (b) の条件で高いリスニング理解を得ていることが判った。また、追跡面接においても同様の結果が得られた。しかし、本研究結果から解釈が 2 つに分かれ（下記、H1, H2）、さらなる確認が必要となった。そのため、Study 2-2 ではこの 2 つの解釈を検証することを目的とし、4 条件のリスニング理解を調査している。

H1: 背景知識によってリスニング理解が促進される
H2: リスニング理解を促進するための語彙知識をうまく利用できない

その結果、Study 2-1 で得られた結果、つまり (a) < (b) が再現され、(a) = (d) < (b) = (c) の順で理解に差が見られた。また、語彙認識のタスク（Study 2-3）では、語彙認識は (a) の条件におけるリスニング理解とのみ相関関係を示しており、仮説が支持された。

中級下位学習者を対象とした場合は、リスニング理解のタスク（Study 3-1）では上述の (b) よりも (a) の条件で高いリスニング理解を得ていることが判った。また、追跡面接においても同様の結果が得られた。しかし中級上位者の場合と同様、本研究結果からの解釈が 2 つに分かれ（下記、H1, H2）、さらなる確認が必要となった。そのため、Study 3-2 ではこの 2 つの解釈の当否を検証することを目的とし、4 条件のリスニング理解を調査した。

H1: 語彙知識によってリスニング理解が促進される
H2: リスニング理解を促進するための背景知識がうまく利用できない

その結果、Study 3-1 で得られた結果 、つまり (b) < (a) が再現され、(d) < (b) < (a) < (c) の順で理解に差が見られた。また、語彙認識のタスク（Study 3-3）では、語彙認識は (a) の条件におけるリスニング理解とのみ相関関係を示しており、仮説が支持された。

第 6 章では、上記3つの実証研究で得られた結果と考察に基づき、外国語（英語）能力の差異から垣間見られたリスニング理解における背景知識と語彙知識の役割について、全体的な議論を行っている。まず、リスニング理解のプロセスには、外国語能力の条件により差が見られることに言及し、英語上級学習者の場合は、相互的確証的なプロセスを示しており、中級上位学習者と中級下位学習者の場合は、相互的補償なプロセスを示していると論じている。さらに、中級上位学習者と中級下位学習者による研究結果の違いから、それぞれのレベルに見られるリスニング理解上の課題についても言及している。また、先行研究の結果と中級下位学習者の結果を比較して、「語彙知識不足を補うため背景知識に依存する」という相互的補償の考え方については、はっきりとした結論を主張することが現段階では難しいと指摘している。

本論文の最終章である第 7 章では、これまでに報告された 3 つの研究が持つ限界点が述べられた後、研究結果の要約が示されている。その後、本研究結果から導き出された教育的示唆および研究的示唆が提示されている。前者の教育的示唆としては、(1)リスニングにおいては、外国語能力の差異に応じた指導が重要であること、および相互的確証および相互的補償に見られる相互的な側面に注目し、指導する必要があること、(2) 中級上位学習者に対しては、過度に背景知識に頼らないように、語彙知識の増強と使用を促す必要性があること、また、中級下位学習者に対しては、リスニングに際して、背景知識を十分に活性化する必要性があること、などが言及された。後者の研究的示唆としては、リスニング理解の研究における混合研究法の有用性についての言及があった。

最後に、今後の研究の方向性として、(1) 本研究結果に基づいた教育実践（教育的介入）の効果を検証する必要性があること、(2) 本研究結果を第一言語の場合と比較することにより、第一言語ですでに獲得しているリスニング理解の処理プロセスが、第二言語の処理にどのように影響を及ぼしているのかを調査することが期待されるということ、および (3) 本研究の限界点を修正した追加研究を、今後行っていく必要があること等が述べられ、論文が締めくくられている。

論 文 審 査 結 果 の 要 旨

論文の提出に先立ち、提出要件審査委員会（委員：竹内 理、山根 繁、新谷奈津子）は、古屋あい子氏が本研究科の定める「博士論文（課程博士）審査に関する覚書」の論文提出基準を満たしているかどうか確認した。その結果、同氏は、（１）必要単位（10 単位）を取得済みであり、博士論文のテーマと関連する分野で（２）論文３編（うち１編が査読付き国際研究誌）を公刊し、（３）口頭発表４回を（国際学会１回、全国研究大会３回、）行い、（４）博士論文聴聞会（2020 年 8 月 5 日開催）も重大な問題の指摘なく終了しており、論文提出のすべての要件を満たしていることが確認できたため、研究科委員会（2020 年 9 月 23 日開催）に報告し、同氏からの論文提出を認めるとの了承を得た。その後、2020 年 10 月 31 日（コロナ禍の影響のため提出期限を１ヶ月延期）に古屋氏から提出された論文を学位請求論文として受理し、研究科委員会（2020 年 11 月 25 日開催）において承認された論文審査委員会（主査：竹内 理、副査：山根 繁、副査：新谷奈津子、学外委員：吉井 誠 熊本県立大学教授）での審査に入った。また、所定の手続きと閲覧期間をもって、研究科専任教員への論文開示も行った。

提出された英文論文（145 頁）では、広範囲に文献の渉猟を行っており、引用論文の数は 77 編にのぼっていた。これらの文献を研究テーマとの関連性から精査し、リスニング理

解のプロセスが、外国語（英語）能力によりどのように変わるのかという研究課題を選定し、その後に３つの実証研究に取り組んだことは、手法の手堅さの面から高い評価に値するものと言えよう。また中心となる実証研究では、変数を十分に管理し、各種統計手法を用いながら精緻にデータを分析しており、さらに、限定的であるとはいえ、質的データを追加するなどして、混合法の手法を実現し、これらに基づいて適切な解釈・主張を行っている。ここには、実証性を重んじる古屋氏の研究アプローチがよく顕れているといえる。

上記に加え、以下の４点からも本論文は優れているものと判断する。

(i) ボトムアップ・トップダウンという処理の枠組みだけではなく、外国語（英語）能力という変数に焦点を当てることで、新たな知見を当該分野にもたらしたこと、
(ii) 現象の指摘だけではなく改善方法まで提案しようとする姿勢は、外国語教育学の博士学位請求に相応しいと考えられること、
(iii) 各章の相互の関連性がきわめて高く、論理的かつ整然と論文が構成されていること、
(iv) 上記の成果が国際学会・国内学会でも複数回発表され、査読付きの国際研究誌にも掲載されるなど、その独創性や有用性が国内外で高く評価されていること。

なお、本論文の研究では、参加者に対して十分な説明を行い、彼らが同意のもとで参加（あるいは辞退）する形式を採用していた。また、匿名性も担保されており、研究のいかなる時点でも、自らの意思でデータを撤回することを参加者に許容していることから、研究倫理の面からも問題がないものと考えられる。加えて、補習等を行い、実験のため失われた学習機会を研究参加者に補償するなど、教育的にも十分な配慮がなされていた。

上記を受けて、古屋氏の学位請求論文が、研究の方法や内容、倫理的配慮、教育的配慮、記述の体裁や論理などすべてにおいて、本研究科の博士号に値する水準に達していることを、審査委員会一同が認めた。